

佳作

「チーム医療の一員であることを実感した体験」

原田明（株式会社メディカルリソース C S O 事業部）

静まりかえった病院の廊下。時計の針はとっくに午前零時を回っていた。MR（当時はプロパー）という仕事にマンネリ感を抱き、いつもは病院で退屈な時を過ごしていた私がこの日は時が経つのを忘れていた。家族控室から深い嗚咽が聞こえてきたのはそれから暫く経ってからであった。

それは私がMRを始めて10年程が過ぎた寒い冬であった。山間の地方都市を担当していた頃の事である。担当病院の循環器部長から「至急来て欲しい」との指示。「又怒られるのかな」と不安を胸に駆け付けた。その当時多くのMRが怯える恐い先生であり、私もそのひとりであった。病院に着くと先生は英語で書かれた論文に目を通しながら私を待っていた。「ここに書かれている薬は君のところだよね。」英語の論文に戸惑いながらもそこに書かれていた一般名は毎日口にする主力製品Aであった。話をうかがうと重い心臓病の子供が米国での治療を待っているがこのままでは渡米までもたないかもしれないとの事。患者さんも御家族も永い年月ずっとこの病気と闘い続けていることも知らされた。当時この病気には禁忌とされていた製品Aが欧米では効果が期待されるとの症例報告が出始めていた。「至急論文を集めて最も良い使い方を教えてくれないか。」先生は私に何度も頭を下げた。そこにいた先生は私が今まで抱いていた怖い先生ではなく、何とか患者さんを救いたいと訴えるひとりの医師であった。

病院を出た私は直ぐに本社学術部へ電話を入れ事情を説明しサポートを依頼した。暫くすると病院で待っていた私に本社から連絡が入った。「適応外であり、まして禁忌である疾病に処方促す情報提供はできない。適応外なのでお手伝いできないと先生に伝えなさい。」との指示。その当時の会社の判断として、このような指示がでるのはある程度予測はしていた。私は落胆の気持ちと同時に何とか助けてあげたいという真剣な先生の顔と、必死に生きようとしている患者さんや御家族の姿が頭をよぎった。私もひとりの人間としてこの患者さんを救いたい。MRという仕事をして初めてそう思えた。私は再度本社の開発担当の同僚に電話を入れ、事情を説明し必死に思いを伝えた。翌日同僚から文献検索結果が送られてきた。“英語ばかりで文献探しが大変かもしれないけど患者さんの為に悔いの残らないよう頑張れよ！”メモにはそう記されていた。その日から私の大学病院の図書館通

いと、今まで避けて通っていた英語論文との悪戦苦闘が始まった。先生には関連する論文が見つかりしだい一日に何度も足を運んだ。調べるうちに常用量より遥かに少ない量であれば効果が期待されることもわかった。しかし製品Aは錠剤でありそのままでは用量調整ができなかった。薬剤部の先生方に論文を説明し協力を仰ぐと、私が準備した製剤に関するデータを基に投与方法について夜遅くまで検討してくれた。この時私は患者さんを助けたいという思いは誰も同じであること。そしてひとりの命を懸命に救う為に夫々の役割で多くの医療スタッフの方々が懸命に努力をしている姿に、チーム医療の限りない可能性をみた気がした。そしてMRである私自身がチームの一員であることを実感した。

家族控室から出てこられた先生は私をみつけると静かに歩み寄り優しく肩を抱きながら「助けてあげられなかったよ。」とつぶやいた。その目は涙で滲んでいた。その後、微かな笑みで「ありがとう。御家族も感謝していたよ。」の言葉に私も涙を止めることができなかった。これをきっかけに、MRは直接患者さんと接することはできないけれど、間違いなく一人ひとりの命に関与している仕事であることを胸に、私のMR活動は大きく変わっていった。

転勤でこの地を離れた私に、数年後この病院の担当MRから電話が入った。循環器部長に東京で開催する研究会への出席を依頼したところ、先生から「私と会えるのなら是非参加したい。久しぶりに話がしたいので私に来るように伝えて欲しい。」との事。私はMRという仕事を通じ、このような先生方とお会いできた事が私自身の掛け替えのない財産であり、それを誇りにしたいと思った。

その後、私はMRを指導する立場を与えられたが、一人ひとりのMRが誇りに思える財産をつくれるよう精一杯のサポートを惜しまないつもりである。